

芦屋大学論叢 第76号
(令和4年3月24日)抜刷

O.F.ボルノーとV.E.フランクルの教育学における
「超越」についての一考察

名 和 優

O.F.ボルノーと V.E.フランクルの教育学における 「超越」についての一考察

名 和 優
芦屋大学大学院博士後期課程

1. はじめに

1.1 『教育』という思想の危機

『思考のフロンティア 教育』の中で、広田¹⁾は、「『教育』という思想の危機²⁾」について論じている。「『究極の原理を規定し、それとの関わりで人間存在を定義し、究極の原理への段階的な移行の中に教育をみるという基礎付け主義的な思考形態』が近代以前の教育思想の支配的な在り方であった³⁾」という。そして、「そうした古い基礎を破壊した啓蒙思想においても、人々は『何らかの基礎に基づいた教育の可能性というものを信じていた。だからこそ、人々は依然として教育について「熱く」語れた』。⁴⁾」と述べている。続けて、「ところが、20世紀に入って、(1)自らの基準を絶対化するファシズムとスターリニズムの悪夢、(2)植民地の独立と少数民族の地位の向上による西洋中心主義への懐疑、そして、(3)ニーチェを端緒とし、ハイデガーやウィトゲンシュタイン、クワインやクーンらによる、哲学・科学史からの批判が、『基礎付け主義』を崩壊⁵⁾」させたとして、だから教育を構成し正当化する言語を喪失してしまい、「教育の危機」を生み出したと述べている。また、「近代教育学理論の多くは、『社会の発展法則』や『人間の本質』などの普遍的・超越的な原理や価値をア・プリオリに設定し、そこから具体的な規範命題を導出する論理構成をとってきた」がフーコーの権力論などにより、「確実な根拠のない権力」である『教育』が善性を失った⁶⁾という。そして、「今や教育についてあらゆる超越的な足場が失われたところに、われわれは立っている。教育はどこに向かっていけばよいのか」と問を投げかけている。⁶⁾

今、日本の教育は大きく変革している。新たな方向性を持って進みつつある。では、「超越的な足場」というものについてはどうだろうか。様々な要因により、一旦失われたかのような状況になったかもしれない。しかし、「新たな超越的な足場」として教育の中に必要とされるものが、O.F.ボルノーやV.E.フランクルの思想の中に、今までとは異なる、新しい在り様として、生き生きと力強く存在しているのではないかと考えている。

1.2 本来的で超越的な出会い

「超越的」というとき、筆者はまさに「出会い」こそ「超越的」なものではないかと考えている。人と人の「出会い」、人と時代の「出会い」、文化と文化の「出会い」、さまざまな「出会い」の中で世界の時空間は形成されていく。このように人生の様々な場面で出会いは生じているが、人生における大転換（コペルニクス的転回）といえるような、在り方生き方の変容や転回を引き起こす超越的な出会いというものは、日常の予期せぬ時に突然現れ、私たちに何らかの変容や転回を引き起こし、また私たちを新たな日常へ投げ返す。フランクルの思想に従うと、「超越」の声は、人生のいたるところで常に発せられているが、私たちが常にその声を聞く機会に恵まれているわけではないという。内なる良心が自己を省み、「超越」へのアンテナを広げたとき、現実の連続的な時間に、非連続に、垂直に、瞬間的に訪れる。受信し受け取ることができるか

どうかは私たちに託されている。本来の超越的な出会いとは、このような姿なのだろう。

またボルノーも、その著『実存哲学と教育学』において、マルティン・ブーバー (Martin Buber, 1878~1965) を取り上げ、「真の生はすべて出会いである。」⁷⁾ という言葉を援用している。ブーバーは、生ける〈汝〉の世界を、客観的で即物的な連関を意味する〈それ〉の世界とまったく異質なものとして区別し、そして、人間的な出会いの関係を「我ーそれ」でなく、「我ー汝」と表現した。つまり、「我ーそれ」という関係の危うさと、「我ー汝」という関係性の重要性を説いたのである。この「我ー汝」ように、本来の人間同士の関係性の中であれば、超越的な出会いというものが存在すると捉えている。(これは他者への超越というフランクルの自己超越の考えと共通する部分があるので、今後も継続して研究を進めたいと考えている。)そして、超越的な出会いに対して自らが開いていること、超越に対して扉を閉ざさないこと、またどのような困難があろうとも閉ざされないことが、捉えがたい超越というものに対する身構えとして、私たちにとって最も重要なことなのではないかと考えている。

1.3 教育における「超越」の意義

しかし、さまざまな情報技術が高度に進化した近未来の社会は、人間の重要な役割や使命、生きる意味までも、もので代用してしまうという危険性を孕んでいる。「我ーそれ」という即物的な関係を強靱に推し進めてしまっているようにも見える。ここで、再度、「我ー汝」という、生きている人間の、人間的かかわりや人間とは何かということについて考えを深め、対話し、議論を重ねることが大切である。そして「超越」というものに関する教育をどのように進めていくべきかを、今後の教育の進むべき方向として模索していく必要があると考えている。

現在、日本の学校教育は大きな変革期を迎え「メタ認知」ということも重要視されている。「メタ」とは、「あとに」、「超越した」「高次の」、さらに *metamorphose* などの「変化」という意味もある。「メタ認知」の場合、認知すること自体を、より高い視点から認知することとして「認知についての認知」、「高次からの認知」として捉えられている。より高い次元から物事を眺望する、「自分の中にいる、自分を見つめるもう一人の自分」と表現されることもある。狭い視野にとらわれず、広い視野から物事を捉え、冷静に分析し判断し行動する司令塔の役割を果たしているといえる。これはとても大切なことである。しかし、筆者はあえてこの「高次からの認知」に対して、より高い「高次への認知 (認識)」というものを人間の生にとって必要不可欠なものとして考察しようと考えている。それを、本論考では「超越」として考察している。

多数の若者や子ども達が生き方に迷い彷徨っている現代において、より高い「高次への認知 (認識)」として「超越」の存在を自覚することは、人間の精神の尊厳を支えるものを獲得するために重要なことである。そして、これを教育の中にどのように位置付けていけば良いのかということは、今まさに、喫緊の課題として顕現している。過去においては、利用され、悪用され、虐げられてきた、また現代においては、高度な技術革新などによって、人間が粹付けされてしまい、その存在自体が覆い隠されそうになっている「超越」というものについて、自覚し再認識できることが、これから生きる若者や子供たちを支えるものとなるのではないかと筆者は考えている。

本稿では、O.F.ボルノーとV.E.フランクルの思想に依拠しながら、「超越」に関する考察を進め、さらに教育において「超越に関する教育の重要性や必要性」を説く一助にしたいと考えている。

2. O.F.ボルノーの生涯と思想

2.1 ボルノーの生涯

オットー・フリードリッヒ・ボルノー (Otto Friedrich Bollnow, 1903-1991) は、1903年3月14日、当時プロイセンの一州であった北ドイツ、ポンメルンの州都シュテッティーン (Stettin) で、代々続いた教員の家で誕生した。また、ボルノーの父親オットー・ボルノーは、改革教育学運動の闘士で、そのためにボルノーもその運動を若い日より間接的に耳にしながら育っていった。第1次世界大戦後、父親はアンクラム (Anklam) の小学校の校長となり、新たに計画された学校を設立した。ボルノーはこの小さな町で少年時代を静かに過ごしていく。ボルノーの小学校、中学校時代は順調に経過し、高等学校で彼は文化ギムナジウムに進学し、最も有能な生徒の1人としてギリシャ語とラテン語に励んだが、この時点ではまだ現代の精神的主張に本気で関与していなかった。ボルノーは数学と物理の研究をベルリン大学で学び始め、さらにグライフスヴァルトとゲッティンゲンでその勉強を続けることになる。そして、1925年ボルノー22歳のとき、『酸化チタン、ルチウムおよびアナタスの結晶格子理論』の研究でゲッティンゲン大学において博士の学位を取得している。しかし、同時にそれと並んでボルノーは当時ゲオルグミッシュやノールを聴講し、彼らの演習に参加していた。ボルノーは理論物理学研究所でさらに研究を続けることになっていた。しかし、ボルノーの指導教官のマックス・ボルン教授が1学期間、客員教授としてアメリカに招待され、その期間(1925年、26年の冬学期)をオーデンヴァルト学園へ教師として赴任した。後日、この経験はボルノーにとって『美しく実り多き、本当に幸福な時間』であったと述べている。そして、ゲッティンゲン大学に戻った時には、もはやボルノーに再び物理学研究への興味は湧かず、今や全身全霊を打ち込むべきものは、教育学と哲学のなかにしかみいだせなかった。それを聞いたボルンは、共同研究の謝礼金を気前よくボルノーに譲ってくれ、それを学資にして、ボルノーは1学期をベルリン大学のシュプランガーのもとで哲学を学んだ。その後、ゲッティンゲン大学に戻り研究を深めていくことになる。

第2次世界大戦が終結したのち、一切の伝統的理想が疑わしくなった完全な崩壊の現実のなかでいかにして健全な道徳的・倫理的生活が可能であるのか、という哲学的な問いが人々の心を深く動かした。この哲学的な問いは『高い理想』の領域がナチスによって徹底的に悪用されたあとでなお道徳的な生活というものが可能なのかという根本的な問いかけであった。また、ボルノーの「素朴な道徳」という概念は、当時のスローガンにまで広がり一世を風靡した。

ボルノーは1953年、50歳でシュプランガー (Eduard spranger, 1882-1963) の後継者としてテュービンゲン大学に招聘された。そして、67歳の1970年の退官まで精力的に哲学・教育学の主任教授としての研究活動を貫き通した。そこでの就任講演のテーマは『希望の徳』であった。またボルノーは、開かれた態度で「二つの椅子の間に座る」ことを思想的に実践してきた。たとえば「生の哲学」と「実存哲学」の緊張関係を生涯持ち続けそこから教育学に対して多大な貢献をなした。くわえて、啓蒙思想の理性概念と非合理主義的なロマン主義に対しても両者に責任を持ち続けようとした。

1991年2月7日、ボルノーは88歳の誕生日(3月14日)を目前にして、胃癌のためにテュービンゲンで生涯をとじた。⁸⁾

2.2 ボルノーの思想

(1) 二つの根本的な教育観

ドイツの哲学者、教育学者である、オットー・フリードリッヒ・ボルノー (Otto Friedrich Bollnow,

1903-1991) は、伝統的な教育観について以下のように言及している。「結局のところ、教育事象の本質については、二つの根本的な見解があり、それらが教育学の歴史において、たえずくりかえしあらわれているということができる。ふつうの、そして素朴な(教育的) 処置をも説明するのに分かりやすい教育観は、手細工人の仕事との類比に由来する。」つまり、「手細工人が、まえもっていただいている計画にしたがって、まえもってあたえられている材料をつかって、適当な道具をもちいて、品物をつくりだすように、教育者もまた、かれの心にうかぶ目標にむかって、かれにゆだねられた人間を、一定の仕方で形成する。」⁹⁾ 言うならば、「教育するとは〈つくる〉ことである。」そして、「ドイツ語では〈陶冶〉(Bildung) と訳される〈精神の形成〉(formatio animae) の本来の意味は、このような、手細工の仕事との類比において解される素材加工という意味にほかならない。」¹⁰⁾ ということであり、子ども達への教育観の一つ目は、(機械的な) 制作にもとづくものとしてあげられている。次に、「人間は、随意に形成されるべき素材では決してなく、内部から、自己に固有な法則にしたがって、自己自身のうちに設定された目標に向かって発展する」¹¹⁾ のだという立場から、「〈陶冶〉はここで、あたらしい、それ以来支配的となった意味において、このような〈有機的な〉成長の出来事」となった。そして「まったく異なった〈消極的な〉教育概念——育成の技術・〈成長にゆだねる〉教育、自然のままの事象を〈攪乱しない〉教育という〈消極的な〉教育概念」が生じたと述べている。そしてこの二つの教育概念に簡単に総括的な名称をつけるなら、「機械的(手細工的) 教育概念と有機的教育概念」¹²⁾ と分けて呼ぶことができるとしている。

(2) 新しい教育観

O.F.ボルノーは、旧来の陶冶性を主とする連続的な教育形式に対して、新しい教育観を生み出している。それは「じっさい異質の、結局のところ理解できない思考法と見なさざるをえなかった」¹³⁾ 実存哲学を出発点として、出会いや訴えかけや覚醒などの非連続な教育形式を教育学の分野に結合した、新しい教育形式である。これについてボルノーは、従来からの教育観に対する根本的な省察をおこない、近代自然科学の発展からの刺激を一例として、¹⁴⁾ 「近代自然科学は、微視物理学的事象を根本的に非連続的(量子的) なものとしてとらえる見解にくみして、『自然は飛躍をしない』というふるい(古典的) 見解を放棄した」のであると述べている。そして、安易にばくぜんとした類比にもとづいた、うたがわしい哲学的推断を戒めながらも、物理学の成果から発見の見地を借り受け問うことにより、実存哲学を出発点とした、非連続に営まれる教育の形式をつくりあげたのである。

またさらに進めて、実存主義克服の問題を取り上げ、新たな庇護性概念として、教育学において「被包感と信頼、感謝と愛、忍耐と期待、その他、教育を支える情感的・人間的な前提と特性」を考察することにより、「いわば新しい独自のカタチで、連続形式の教育学を打ち立て」¹⁵⁾ ているのである。

ボルノーが指摘しているこれら二つの新しい教育形式、つまり、実存哲学を出発点とした非連続に営まれる教育の形式と、実存主義克服の問題から練り上げられた新たな庇護性概念における新しい連続形式の教育学、を知ることは、旧来の二つの教育観にくわえて、教育に携わるものにとって必要不可欠なものであると筆者は考えている。そして、これら二つの新しい教育形式への理解の不足が、現代の様々な問題を引き起こしている一因ではないかと考えている。異質で理解しがたい思考法であるがそれを理解しようと努めること、また、情感的・気分的な諸前提のような、単純かつ自明なもののように見えてかえって理論的徹底を容易に許さないもの¹⁶⁾ に対してしっかりと向き合うことが、今日の教育において大変重要である。そしてこのことを等閑視しないことこそ、若者の失踪や自殺などのような現代の日本社会の問題状況に歯止めをかけ、未来社会においてこれらの問題を減少させていくことにつながると、筆者は考えている。

3. V.E.フランクルの生涯と思想

3.1 フランクルの生涯

我々の多くが、フランクルを知るきっかけとなるのは彼の著作『夜と霧』（原題は「強制収容所における一心理学者の体験」との出会いからであろう。筆者もまさしくそうである。第二次世界大戦のさなか、ナチスによってつくられた強制収容所での、壮絶で苦悩に満ちた体験を、ある種のドラマチックな装飾なしに、淡々と書き綴られているその迫力に引き込まれ圧倒された。この著作を、この著作たらしめているものは何か。自らをも含めたその状況を見つめる視点はいかなるものなのだろうか。筆者は、その底流に流れる深遠な思想に大きな興味関心を持っている。

フランクルは、1905年3月26日、兄のヴァルターと妹のステラに挟まれた第2子としてオーストリアの首都ウィーンで産声をあげた。フランクルの母エルザは、プラハの貴族の由緒正しい家系の出身である。彼女は12世紀に活躍した聖書などの解釈をしたユダヤ人の末裔であり、また、同時に有名なプラハの偉大なラビ（ユダヤ教の教師）の子孫でもあった。さらに叔父には、オスカー・ヴィーナーという詩人もいたという。また、その前半生はアウシュビッツからの解放とともに終わり、戦後の後半生は台頭する物質主義とニヒリズムに対する闘いによって貫かれていた。これらにフランクルの専門である精神医学を付け加えれば、そこに彼の概観が描けよう。最晩年は、好きな読書にも支障が生じるほど視力が弱まり、重い心臓病をわずらい、1997年9月2日の早朝、ウィーンで心停止のため死去、92歳の生涯であった。

フランクルは、世界的に有名な『夜と霧』の著者というだけでなく一人の精神科医である。そして、フロイト、A.アドラーにつぐウィーン第3学派と呼ばれる精神療法（ロゴセラピー）を創始した精神医学者である。彼は、フロイトやA.アドラーの主張に対して、人間は単に性的快楽を追求する「快楽への意志」や劣等感の補償（優越欲）を追求する「力（権力）への意志」によって衝動的に駆り立てられるだけの存在ではないと批判し、人間は自己の存在の意味を希求する「意味への意志」によって魂を吹き込まれる存在であるとしている。¹⁷⁾

3.2 フランクルの思想

(1) 人生の意味（生きる意味） —意味を見つけるための三つの価値—

生きる意味の重要性を語るフランクルは、絶望や危機の中ですらなお「人生には意味がある」という。そして、自分の人生の生きる意味を見つける、または実感しながら生きていけるようになるための手がかりとして、3つの価値をあげている。それが、「創造価値」「体験価値」「態度価値」である。そして、人生において実現すべき意味もまた「創造価値」「体験価値」「態度価値」の三つの領域に区分されるという。

「創造価値」とは、活動し創造することによって実現される価値のことであり、具体的にはその人になされるのを待っている仕事、その人に創造されるのを待っている芸術作品などを指し示す。

「体験価値」とは、自然の体験や芸術の体験、だれかを愛する体験によって実現される価値である。換言すれば、真・善・美の体験や人との出会いによって、世界から何かを受け取ることによって実現される価値を意味する。

「態度価値」とは、自分が変えることのできない運命を自らに引き受けることを通して実現される価値のことである。たとえば、ひとが病気に対してとる態度、病気と対決する心構えであり、また真の運命を正しく誠実に「受苦」することであり、ここでは特に運命を決断によって自らに引き受けるという実存的な契機が特徴をなしている。¹⁸⁾

(2) 苦悩

さらに、「意味」に対する最も高い評価は、行為や成果や愛に「意味」を見出す機会を奪われてもなお、この「苦悩」に対して立ち向かい、自分自身を超越する人々のためにとっておかねばならないとフランクルは主張するのである。¹⁹⁾

なぜなら、フランクルによると、人間は普段、「ホモ・サピエンス (Homo sapiens) = 成功人間」、つまりどうすればいいかを知った「知恵ある人」だとしてみられている。つまり、成功するにはどうすればいいか等々を知っている賢い人である。「ホモ・サピエンス」は、いわば「成功人間」であり、彼らは〈図1〉における「成功」と「失敗」の二つの範疇しか知らず、その水平軸上でしか考え行動しないと指摘している。したがって、「ホモ・サピエンス」の人生は、この「成功」と「失敗」の間で、一本の成功倫理の路線を動いているだけであると結論づけている。しかしさらに、他方でフランクルの造語でもある「ホモ・パチエンス (Homo patiens) = 苦悩する人間」の範疇は、その軸と直交し、別次元の「意味の実現」と「絶望」を両軸とする軸上で考え行動するのだとしている。つまり、「成功」や「失敗」に関わらず、意味を満たすことで自己を実現させていくのである。したがって、「失敗」して「苦悩」のただ中であってもなおそこに「意味の実現」を見だし達成感を感じることができるのである。また、逆に「成功」しているにもかかわらず「絶望」の淵に立つこともある。ここでいう絶望は自分の人生が明らかに無意味だと感じることで、つまり、実存的空虚ということである。²⁰⁾

フランクルは、異なる新たな次元(座標軸)を準備(発見し設定)することにより、苦悩に向き合うものにも、人生の意味実現に向けて、私たちに道を開いてくれたのだと考えている。ただし、これは単なる思いつきなどではなく、自らの壮絶な体験において観察・考察し浮き彫りにした、新たな次元なのだとは筆者は捉えている。

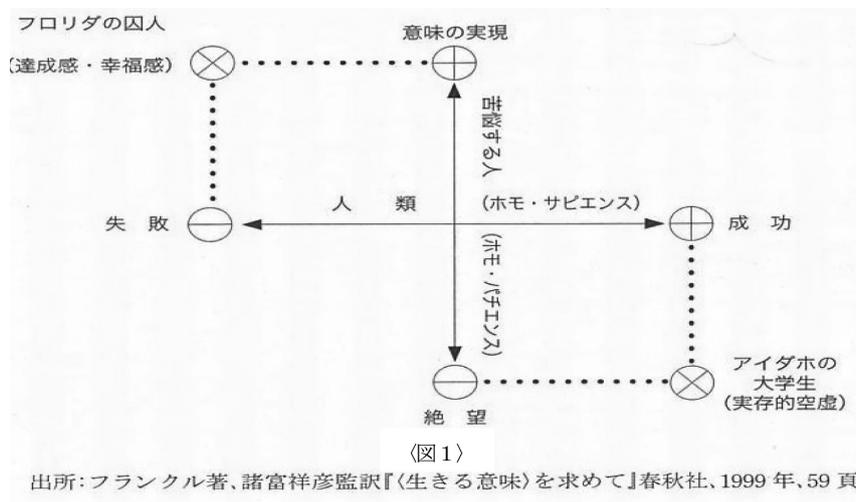


図1

4. 「超越」について

4.1 ボルノーにおける超越（上への超越）

広岡は『ボルノー教育学研究 増補版 下巻』において、自然・文化・社会との諸連関というボルノーの思想と森昭が整理した人間存在の基本構造の図式との照合・融合を試みている。（〈図2〉参照）また、高坂正顕がキルケゴールのキリスト教信仰を基板として定義した「上への超越」を取り上げている。これは、高坂が実存哲学と生の哲学とを「超越」という共通概念で区別したものである。そして広岡は、林忠幸の提示する図式において、人格的層の上方に向けて「上への超越」を付加している。（〈図3〉参照）さらに、〈図4〉のようにボルノーの具体的な教育学的考察である、家庭教育論・女性教育論・平和教育論・高齢者教育論・環境教育論を図式の中に定位している。（〈図4〉参照）以下、この位置づけに依拠して考察を進める。

キリスト教の実存哲学に依拠した「上への超越」に該当するボルノーの教育思想は、包括的な「新たな庇護性」概念で説明することができる。具体的にボルノーは、家庭教育論と女性教育論を「新たな庇護性」概念を基盤として展開している。²¹⁾

ボルノーの家庭教育論の核心は、現代人を「故郷喪失者」として特徴づけている。人間が健全さを保つためには、安全で庇護されていると感ずる空間を必要とする。しかし、人間が繰り返し安らぎを感じうる家庭を持つことができなくなったとき、彼の生はその拠り所を喪失する。このことは、「実存主義を上を超越する『新たな庇護性』『新たな連続性』という人間の『生かされて存在する』という超越的認識理解と重なり合ってくる。」²²⁾そして、現代人の焦眉の課題とは、「投げ出され」「寄る辺なき存在」となってしまった状態を克服して「安らぎ」と「信頼」に満ちた世界に住むことを学ぶことにあるとしている。そこで「実存主義という「非連続性」を上を超越する宗教的ともいえる領域で、人間は「新たな庇護性」や「安らぎ」「信頼」を獲得することができるのであり、こうした絶対に信頼できる世界を創造することが元来、教育者である女性の使命であると、ボルノーは考えた。ここで一旦、ボルノーの思想的貢献がジェンダーフリーに対して逆行するものではないということをつけ加えておく。むしろ可能な限り、女性の地位向上を援助するものである。筆者は、父性的なものに対する母性的なものということを伝えようとしていると解釈している。

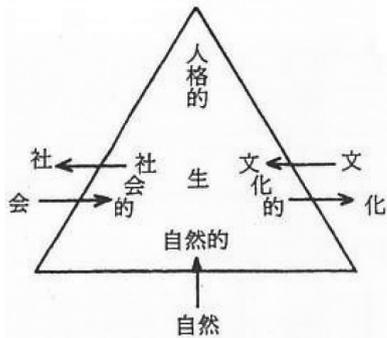
私見であるが、ボルノーは無神論的実存主義の負の側面としての実存の孤独という問題を新たな庇護性や新たな連続性という概念で克服しようとし、人間の人格的な側面での超越の世界を明らかにしたと考えている。

4.2 ボルノーにおける超越（下への超越）

ボルノーにおける「下への超越」とは人間の実存的生の層を支える「生」の層における超越を意味する。ボルノーは実存哲学の負の側面をディルタイの生の哲学によって補完しようと努めてきた。ここでの鍵概念は「生の連関 (der Lebensbezug)」である。これは、活気に満ちた人間の生をわれわれ自身の生命の根底におき、底に向かって超越することにより、人間の生命を確保しようとする「下への超越」であると高坂は指摘している。²³⁾このことを、具体的にボルノーは、高齢者教育論、平和教育論、環境教育論において展開している。ボルノーは、高齢者教育論の中心概念を、高齢という実存的危機をいかにして本来的な「生」として捉え直すかという点で把握している。そして、その危機が老人を自己自身へと投げ返すことを重視し、そこに老齢の積極的な意味を見出している。また、肉体的には老化しつつも、精神的にはいつも根源に回帰する若々しさをもつことによって、硬直化を回避するという「若返り」という視点も同様に重視した。平和教育論では、実存哲学の範疇としての非連続性の特徴を重視するのではなく、むしろ連続性の領域内でその思

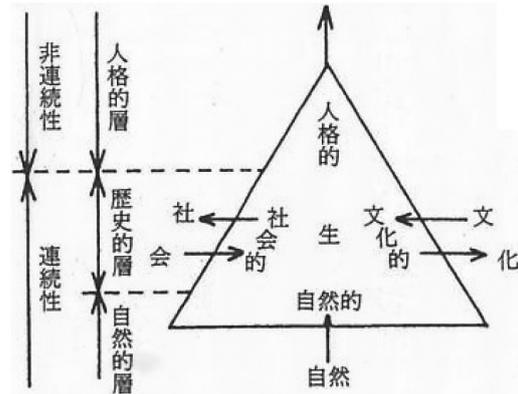
想を展開している。²⁴⁾ 環境教育においては、実存哲学の非連続の欠陥をディルタイの生の哲学によって補強している。人間の実存的生の層を支える「生」の層における超越が「下への超越」として理解される。²⁵⁾ また、人間の再び獲得しなければならない「本性」(Natur)としての自然を、自然からの語りかけ、「自然の声」として問いを投げかけている。(以下〈図4〉参照)²⁶⁾

この自然からの語りかけは、フランクフルトにおける、人生からの問や意味への意志と親和性があると捉えている。自己の良心という受容体によって、超越からの語りかけに耳を傾け、それに対して応えていくという姿と重なり合うところがあるのではないかと考えている。



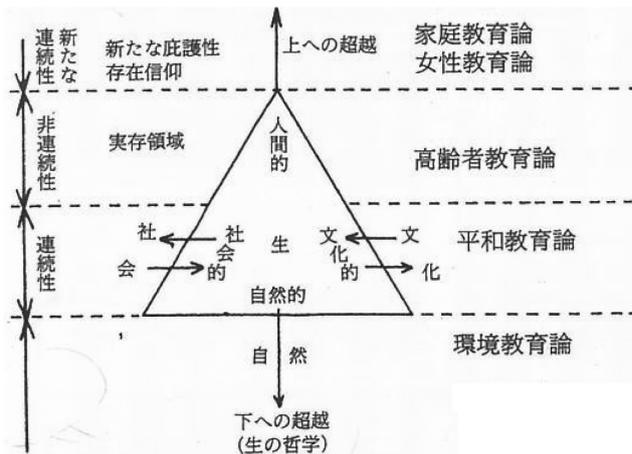
参照：森 昭【教育の実践性と内面性】
黎明書房，1978年 30頁

図2



参照：林 忠幸「見失われた教育の次元」
福岡教育大学紀要第23号
1973年 19頁

図3



広岡義之による

「ボルノーにおける実在主義克服の一考察——新たな庇護性の教育学的意義——」
人文論究，関西学院大学人文学会，1984年，
第34巻2号，123頁の図に加筆したもの。

図4

4. 3 フランクルにおける次元的存在論の第一の法則〈図5〉

フランクルは人間存在が多様で多面的なことを認めているが、それを統一的に、多様性を認めたまま統一的に人間存在をとらえることを、人間理解の基礎視角としている。フランクルは、多様性における統一と定義される芸術を念頭に置いて、「私は、人間を、多様性にもかかわらずの統一と定義したい。」²⁷⁾と述べている。そしてそれは、「多様な存在様態にもかかわらず、人間学的な統一性が存在するから」²⁸⁾だという。そして、「人間の実存の特徴は、人間学的な統一性と存在論的な差異性が共存すること」だと指摘している。「それゆえ、多元論も一元論（たとえばベネディクティ・デ・スピノザの『幾何学的秩序によって証明されたエチカ』に見られるような一元論）も人間の实存を正しくとらえるものではない。」²⁹⁾と結論づけている。つまり、存在している次元よりも低次の次元へ投影された形からだけ見てしまうと、人間の实存を見誤る危険性が高いというのである。

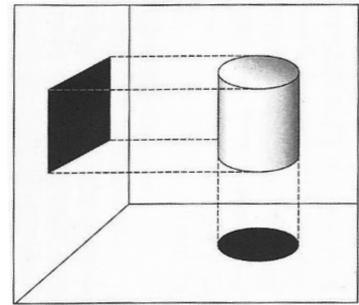


図5

ある一つの物体を、それが存在している次元から、相異なる、それよりも低次の次元に投影すると、一様に投影図が描き出されるが、各々の投影図は互いに矛盾している。（〈図5〉参照）

たとえばコップを、つまり幾何学的にいえば円柱を、三次元の空間から二次元の平面である底面と側面に投影すれば、一方の場合は円になり、もう一方の場合は長方形になる。さらに、コップは開いた容器であるのに、それぞれの投影図は閉じた形になっているという点でも互いに矛盾している。³⁰⁾

このアナロジーで人間存在に関する考え方を理解すると、一面的な還元主義やニヒリズムの問題点は明らかになってくる。この点からも、複雑な人間存在を統一的に把握しようとするフランクルの視角の重要性が認識できる。

4. 4 フランクルにおける次元的存在論の第二の法則〈図6〉

（同一の物体ではなく）互いに異なる物体を、それらが存在する次元から、それよりも低次の（相異なる次元ではなく）同一の次元に投影すると、一様に投影図が描き出されるが、それらは（互いに矛盾しない）多義的な投影図になる。（〈図6〉参照）たとえば円柱、円錐、球を三次元の空間から二次元の底面へ投影すると、その結果生ずる投影図は、どれもみな円になる。それらの影を円柱、円錐、球から投射されているものと見なすならば、まさに同じ形をしたこれらの影から、それらの投射したもとのものが円柱・円錐・球のいずれであるのかを推測できず、そのかぎり、これらの影は多義的で曖昧なものになる。³¹⁾

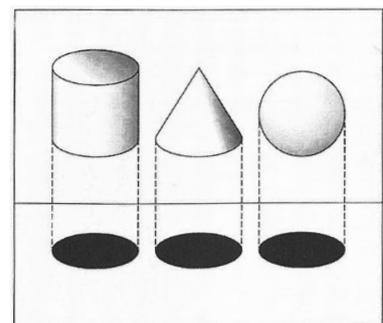


図6

では、これらのことを人間に当てはめると、やはり人間もまた、人間に固有の次元が還元され、生物学と心理学の平面に投影されると、一様に投影図が描き出されるが、それらは互いに矛盾している。なぜなら、人間が生物学的な平面に投影されれば、その結果生じるのは身体的な諸現象であり、また心理学的な平面に投影されれば、その結果生じるのは心理的な諸現象だからである。けれども、この矛盾は、次元的存在論の観点から見れば、人間の統一性と矛盾するものではない。それは、円と長方形の矛盾が同一の円柱の投影であるという事実に矛盾しないのと同様である。³²⁾けれども、ここで次のことに留意しておきたい。すなわち、人間の存在様式の統一性は異なる存在様態の多様性に関与し、それらを架橋するものであるが、しかし、こ

の架橋、つまり身体と心理といった反対物の架橋、ニコラウス・クザーヌスが言う意味での反対の一致というものは、人間が投影された平面の中に探しても徒労に終わるだろうということである。むしろ、この架橋はただ、一段高い次元の中にのみ、つまり人間に固有の次元の中にのみ見出されるのである。³³⁾

また、「たとえば第一円の影を『幻聴を有する分裂病』のケース、第二円の影を『ジャンヌ・ダルク』(Jeanne d'Arc, 1412-1431)を表すものと仮定する」と「精神医学の見地からすれば、この聖女は分裂病のケースとして診断されねばならないだろう。」そして「また、われわれが精神医学的照合枠に自己を限定する限り、神のお告げを信じて、後期百年戦争の危機を救ったフランスの国民的英雄ジャンヌ・ダルクは分裂病患者に過ぎない。」ということになる。「しかし、われわれが『精神論的次元』で彼女を考察する場合、彼女の神学的・歴史的重要性を観察するやいなや、ジャンヌ・ダルクは分裂病患者以上のもの、つまり『聖女』となる。彼女がたとえ精神医学の次元では分裂病患者であろうとも、そのことで『彼女が聖女である』という事実はいささかも揺らぐものではない。」³⁴⁾のである。

フランクフルは、このようなことからアナログカルに、超越の次元の存在の可能性を示唆している。つまり、超越の次元が存在しないということではできないということをここで論証しているのである。そして、さらに論を進めてその有り様を明確に浮き彫りにしている。加えて前述の、ボルノーの上への超越や下への超越は、超越の有り様をさらに明らかにし、その豊かな世界を私たちに示してくれていると考えられる。

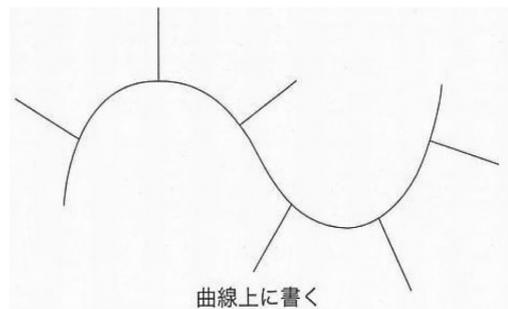
4. 5 人間世界に超越世界が垂直に瞬間的に介入してくる瞬間

フランクフルはたびたび「究極の意味」あるいは「超越性」概念は、もはや「思考」の問題ではなく、むしろ「信仰の」の領域であると表現している。³⁵⁾つまり、そこに整然とした論理的で完璧な根拠を示すことはできないといっているのだと筆者は考えている。また、「人間世界」と「神」の世界の次元的相違を認識することは、「究極の意味」あるいは「超越性」を考えるうえでもおおいに役立つ。³⁶⁾たとえば、「神は曲線の上にまっすぐに書く」という言葉を考えた場合、二次元の平面の曲線上に、垂直な平行線を描くことは出来ない。二次元上では〈図7〉から理解できるように直線上に垂直な平行線を置くことは出来ても、〈図8〉のように曲線上では垂直な平行線をけって描けない。³⁷⁾しかし視点を代えて「二次元的平面」ではなく、座標軸をもう一つ加えて、一段高い次元を考えてみよう。すると〈図9〉のような「三次元的空間」においては、曲線の上に垂直な直線を平行に描くことが完全に可能となる。³⁸⁾このようなパラダイム変換のなかで、われわれは「人間世界」と「神世界」の次元的相違のアナロジーを知る。³⁹⁾さらに、「神世界」という言葉について厳密に説明すると、「神世界」そのものではなく「人間世界に超越世界が垂直に瞬間的に介入してくる瞬間」を意味する。超越性が現在の人間世界に飛び込んでくること



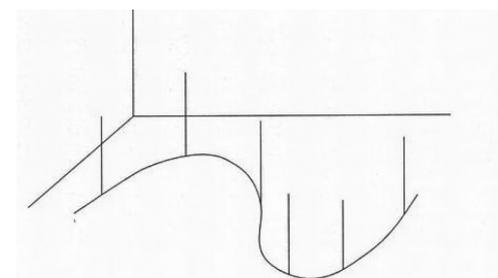
直線上にまっすぐ書く

図7



曲線上に書く

図8



曲線上にまっすぐ書く

出所：フランクフル著、大沢博訳『意味への意志』
プレーン出版、1979年、183～184頁

図9 〈図7, 8, 9〉

であり、宗教とは本来、日常の人間の命に永遠の命が飛び込んでくるところに宗教が関わってくるものと思われる。つまり二次元的平面の人間世界で、われわれに降りかかる「苦難」や「悲しみ」がいかなる手段をもってしても理解できないときでさえ、三次元的空間の神世界（超越的世界）からみれば、自分の「苦悩」や「悲しみ」に深い「意味」と「必然性」が存するということが、このアナロジーで見事に照射されている。⁴⁰⁾

5. おわりに

これからの未来の社会を「超スマート社会」と名づけられている。これは、内閣府が2016年1月に示した Society 5.0 という新たな未来社会の姿のことである。内閣府資料によると、「超スマート社会」とは、「必要なもの・サービスを、必要な人に、必要なだけ提供し、社会のさまざまなニーズにきめ細かに対応でき、あらゆる人が質の高いサービスを受けられ、年齢、性別、地域、言語といったさまざまな違いを乗り越え、生き活きと快適に暮らすことのできる社会」と定義している。Society 1.0 は「狩猟社会」であり、Society 2.0 は「農耕社会」、Society 3.0 は「工業社会」としている。続けて、Society 4.0 を「情報社会」とし、Society 5.0 が「超スマート社会」であるといっている。そして、第5期科学技術基本計画において提唱されたこの Society 5.0 は、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」とされている。また、Society 5.0 では IoT（internet of things）や AI（人工知能）、ロボット、ビッグデータ等の先端技術が産業や社会生活に取り入れられ、様々な変革を創出することも期待されている。

一方で、この社会の急速な発展における軋轢もまた見過ごせない状況にある。上記のような社会環境の大きな変化によって、我々は人工のものに囲まれ、ますます、より高い次元や座標軸に出会う機会を見失う危険にさらされている。人工的に準備された閉ざされた還元主義的な人間把握のもとで、虚無感や無意味感に襲われ絶望の淵に追いやられてしまう状況の増加。また、現代の大きな社会的な問題である若者の失踪や自殺には、このようなことが一つの大きな要因として関係しているのではないかと筆者は考えている。そしてこの問題の解決のためには、自らを超えた人間の生を支え庇護するものの存在への認識を深めることが大切なのではないかと考えている。それが V.E. フランクルと O.F. ボルノーが示している「超越」というものとの関わりであり、その在り様であると筆者は捉えている。

フランクルに従うと、人間は自己自身を反省しているとき、あるいは良心的であるときはいつでも、精神的次元を超越しているという。⁴¹⁾ そして、枠付けされ閉じ込められた自己ではなく、「超越」への扉を開放し、「超越」からの声に耳を傾け、自らが人生に問うのではなく、自らが人生から問われている存在であるというコペルニクス的転回を獲得することが大切なのだと考えている。つまり、その間に対して誠実に真摯に応答していくことが、とりもなおさず意味への意志であり、意味ある人生をおくることにつながるのだと筆者は捉えている。

V.E. フランクルと O.F. ボルノーの思想における「良心」と「責任」、「超越」や「生きる意味」そして「人生から問われている自分」や「存在への信頼」など、両者の思想を比較・対照しながら、今日的意義をさらに浮き彫りにしていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 広田照幸著、『思考のフロンティア 教育』岩波書店、2007年、第5刷、1頁。
- 2)3) 広田照幸著、同上、1頁。
- 4)5)6) 広田照幸著、同上、2頁。
- 7) Otto Friedrich Bollnow, “Existenzphilosophie und Pädagogik: Versuch über un stetige Formen der Erziehung.”
Funfte, durchgesehene Auflage, Stuttgart, Berlin, Koln, Mainz, W.Kohlhammer 1977.S.88.
O.F.ボルノー著、峰島旭雄訳、『実存哲学と教育学』理想社、1951年、第9刷、141頁。
- 8) 広岡義之著、『ボルノー教育学研究 増補版 上巻』風間書房、2018年、初版、24頁。
- 9) Otto Friedrich Bollnow, “Existenzphilosophie und Pädagogik: Versuch über un stetige Formen der Erziehung.”
Funfte, durchgesehene Auflage, Stuttgart, Berlin, Koln, Mainz, W.Kohlhammer 1977.S.16.
O.F.ボルノー著、峰島旭雄訳、『実存哲学と教育学』理想社、1951年、第9刷、20頁。
- 10)11) a. a. O. S.17. O.F.ボルノー著、同上、21頁。
- 12) a. a. O. S.17. O.F.ボルノー著、同上、22頁。
- 13) a. a. O. S.15. O.F.ボルノー著、同上、17頁。
- 14) a. a. O. S.19. O.F.ボルノー著、同上、25頁。
- 15) O.F.ボルノー著、森昭・岡田渥美訳、『教育を支えるもの』黎明書房、2006年、初版、15頁。
- 16) Vgl., Otto Friedrich Bollnow, “Die Pädagogische Atmosphere”, Vierte Auflage, Heidelberg, Quelle&Meyer 1970.
S.109. O.F.ボルノー著、同上、204頁参照。
- 17) 広岡義之著、『フランクフルト教育学への招待 ——人間としての在り方、生き方の探究——』風間書房、2008年、第一刷、27頁。
- 18) 広岡義之著、同上、302頁。
- 19) 広岡義之著、同上、297頁。
- 20) 広岡義之著、同上、303頁。
- 21) 広岡義之著、『ボルノー教育学研究 増補版 下巻』風間書房、2019年、初版、589頁。
- 22) 広岡義之著、同上、590頁。
- 23) 広岡義之著、同上、592頁。
- 24)25) 広岡義之著、同上、594頁。
- 26) 広岡義之著、同上、595頁。
- 27) Viktor E. Frankl, Gesammelte Werke Band 4, “Arztliche Seelsorge. Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse. Und Vorarbeiten zu einer sinnorientierten Psychotherapie.”, Herausgegeben von Alexander Batthyany Karlheinz Biller Eugenio Fizzotti, Bohlau Verlag Wien · Koln · Weimar 2011. S.347.
ヴィクトール・E・フランクフルト著、山田邦男監訳、岡本哲雄/雨宮徹/今井伸和訳『人間とは何か 実存的な精神療法』春秋社、2011年、第1刷、55頁。
- 28)29) a. a. O.S.347. 前掲書、55頁。
- 30) Vgl., a. a. O.S.348. 前掲書、55頁参照。
- 31)32) Vgl., a. a. O.S.349. 前掲書、56頁参照。
- 33) Vgl., a. a. O.S.349. 前掲書、57頁参照。
- 34) 広岡義之著、『フランクフルト教育学への招待』、216頁。
フランクフルト著、大沢博訳、『意味への意志—ロゴセラピイの基礎と適用—』、ブレーン出版、1979年、初版、32頁～33頁。
- 35)36)37) 広岡義之著、同上、308頁。
- 38)39)40) 広岡義之著、同上、309頁。
- 41) 広岡義之著、『フランクフルトと出会って、ほんとうの自分と幸せを感じるための本 —フランクフルト教育哲学入門—』、あいり出版、2018年、第一刷、39頁。